

北軽井沢の山荘の庭では、まだ木々の芽吹きも浅い春の光の中、地面いっぱいに広がるレンゲショウマの若葉が静かに姿を現します。夏に薄紫色の幻想的な花を咲かせるこの植物は、今はまだ花の気配すら見せず、林床に大きな葉を広げ始めたばかりです。しかし、その可憐な夏の姿からは想像しにくいほど、レンゲショウマには独特で周到な生活史があります。冬のあいだ地上部は完全に姿を消し、地下の根茎だけで長い寒さに耐えます。そして春、落葉樹が葉を茂らせる前のわずかな光の季節を逃さず、一斉に芽吹いて葉を広げ、夏の開花に向けて一年分の力を蓄えていくのです。

この庭では、その生活史をよく知るからこそ、毎年まだ何も芽を出していない早春のうちに、落ち葉や枯れ枝を丁寧に取り除く地掃除を欠かしません。うっかり芽を傷める前の短い時期に、林床を整え、光と風が通う環境を守ることが、夏の花景色への大切な準備になります。写真に広がる見事な群落は、そうした年ごとの手入れの積み重ねそのものです。

もともとは、亡くなった深谷の叔父から譲り受けた、ほんの一株のレンゲショウマでした。その小さな命が、この北軽井沢の冷涼な森の環境と、人の手による静かな管理に支えられ、年月をかけて少しずつ株を増やし、今では庭の一角を埋めるほどの群生へと育ちました。一株の記憶が、こうして風景そのものになっているのです。

そして盛夏。深い緑の林の下で、細い花茎の先に蓮のようでもあり、提灯のようでもある薄紫色の花が、何百輪も次々に咲きます。下向きに咲くその姿は、まるで森の中に無数の小さな灯がともったようです。春の地掃除から始まり、叔父の記憶を受け継ぎ、季節を超えて育まれるこのレンゲショウマの庭は、植物の生活史と人の時間とが、美しく重なり合った場所なのです。

(2026年5月上旬／北軽井沢)

